

2015年度 修士論文

ママさんバレーにおける
スポーツ・コミットメントモデルの検討

－中断経験に着目して－

Examining the sports commitment model for “Mama-san” volleyball

－ Focusing on stop experience －

早稲田大学 大学院スポーツ科学研究科

スポーツ科学専攻 スポーツクラブマネジメントコース

5015A320-8

福田 誉

Homare FUKUDA

研究指導教員： 間野 義之 教授

目 次

第1章 序論.....	1
1. 1 研究の背景.....	1
1. 2 先行研究	5
1. 3 研究の目的.....	9
第2章 研究方法.....	10
2. 1 調査項目	10
2. 1. 1 予備調査および内容的妥当性の検討.....	10
2. 1. 2 測定尺度.....	10
2. 2 調査実対象者および手続き	13
2. 3 分析方法	14
第3章 結果.....	16
3. 1 調査対象者の特性	16
3. 2 共分散構造分析を用いたスポーツ・コミットメントモデルの検討.....	17
3. 3 多母集団による同時分析の結果	19
第4章 考察	22
4. 1 中断経験の有無による調査対象者の特性	22
4. 2 ママさんバレーにおけるスポーツ・コミットメントモデル	22
4. 3 中断経験による多母集団の同時分析	24
第5章 結論.....	27
5. 1 まとめ.....	27
5. 2 研究の限界・課題	28
引用・参考文献	30
付録	36

第1章 序論

1. 1 研究の背景

1964年の第18回東京オリンピック競技大会での「東洋の魔女」と呼ばれた日本女子バレーボールの活躍をきっかけに¹⁾、全国的にバレーボール熱が高まり、幅広い年齢層²⁾に渡りバレーボールが普及した。特に、家庭婦人バレーボールのカテゴリーにおいて、高岡¹⁾は、主婦を「家庭の任務のほとんどに責任を持つ既婚女性」と定義したうえで、「既婚の女性が家庭を離れて集団でスポーツを楽しむという習慣が日本には見られなかった」が、小学校のPTAなどの活動が全国的に拡大したとされている（注1）。1973年の「スポーツに関する世論調査」³⁾では、バレーボールに参加した主婦の人数が最も多いことが報告されている。1970年には第1回目の「全国家庭婦人バレーボール大会」も行われており、さらに、全国ママさんバレーボール連盟は、ママさんバレーを生涯スポーツとして親しむことを目的に⁴⁾、50歳以上の大会（いそじ大会）や、60歳以上の大会（ことぶき大会）なども開催しており、幅広い年齢層に参加者を増やしている。内海⁵⁾は、ママさんバレーについて「家庭婦人を対象とするスポーツ大会は世界でも珍しく、また、オリンピック開催をきっかけとしたバレーボールブームから誕生した」と述べている。ブランデーJIOC当時会長（1952～1972）も「オリンピックムーブメントの生きた見本」として賞賛しており、世界バレーボール連盟も、世界唯一のこの大会を注目していると述べている⁵⁾。前述のような大会が実施や継続の一要因になり、さらに高岡¹⁾は「主婦たちには家庭運営を遂行していく中で感じていた生活の閉塞感があり、スポーツ活動はその行き詰まりを開放する手段となった」と述べており、主婦の開放と「主婦性」（既婚女性が家庭任務のほとんどに責

任を持ってその役務を遂行している状態）の再生産が繰り返されるスパイラル構造をもって家庭婦人スポーツが展開したとしている。ママさんバレーは、主婦が自由に時間を使えるようになってきた当時の世相や社会的な環境があり、その時間をバレーボールに費やせるようになったことによって発展してきたといえる。

しかし、近年ママさんバレーでは比較的若い世代や高齢化に伴う実施者の減少が問題となっている。神奈川県においては、高齢化に伴い 50 歳以上で構成されるチーム（名称：グリーン）、60 歳以上で構成されるチーム（名称：ことぶき）、70 歳以上で構成されるチーム（名称：なでしこ）が増加傾向にある一方、一般チームの登録数が 2003 年から 2015 年までに 28.2%と大きく減少し、全体的な登録チームの減少に影響している（図 1）。こうしたママさんスポーツの実施者減少には様々な要因が関連しており、例えば松永ら⁶⁾は、女性のスポーツ参与阻害要因に着目し、スポーツ参与を希望しているが実現していない場合が多いと述べている。その傾向としては、特に子育て期の女性において顕著であり、「子育て」というものが女性のスポーツ参与に対する阻害要因を生み出していることを示している。

さらに、内閣府男女共同参画局の調査⁷⁾によると、1996 年以降は共働き世帯数が専業主婦数を上回り、女性の就業率が伸長しているが、働く女性が離職する理由としては、結婚や出産が契機として多いことが指摘されている⁸⁾。松永ら⁶⁾の調査では非スポーツ実施者の促進条件の第 1 位が「家事・育児が軽減されれば」とされており、ママさんバレー実施者も主婦である以上、やはり出産や育児、家事、近年ではさらに仕事などの影響を受ける可能性が考えられる。しかし、ママさんバレーにおいて、主婦自らの「趣味」による繋がり、子育てとは違う新たな人間関係であり、新たなコミュニティの形成になる⁵⁾とされて

いる。「家事・育児が軽減されれば」などの促進条件が整い、再びその時間をママさんバレーに時間を費やせるようになれば、コミュニティの中で新たな人間関係を構築することになり、こうした家族以外とのコミュニケーションが小学校の PTA 活動のような女性の社会進出に繋がる可能性も考えられる。また、主婦のスポーツ参加は、一般女性のスポーツ参加以上に出産や育児、家事、さらには仕事など諸制約を克服してのものであるだけに、いっそうの意義も深いものと考えられる⁵⁾。こういった意味でも、ママさんバレー実施者の減少に歯止めをかけ、チーム数を維持する対策を検討することは重要であるといえる。

そこで、ママさんバレー実施者の中で、中断を余儀なくされた状況から復帰をした経験者もいるため、中断経験に着目をした。出産や育児、家事、さらには仕事など、スポーツを継続することに困難な条件があったにも関わらず、なぜママさんバレーを実施できているのかを現在の実施者から聞くことは教訓となり得る可能性があり、現在もしくは将来において中断を余儀なくされた実施者の復帰の際に活かすことができ、それがチーム数を維持できる一つのきっかけになる。こうした研究を行うことでスポーツの実施・継続に、中断からの復帰という観点から効果的な対策を導き出すことができると考えられる。

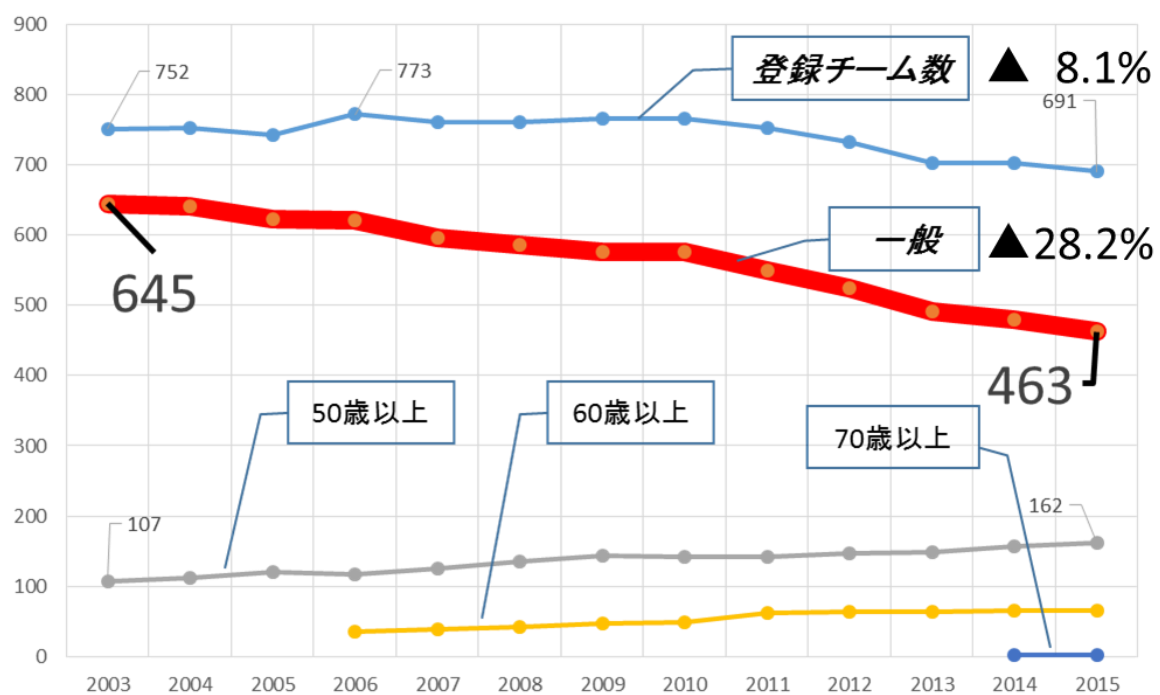


図1 神奈川県ママさん登録チーム数の推移
(神奈川県ママさんバレーボール連盟データより筆者作成)

1. 2 先行研究

わが国のスポーツ実施に関する研究は、スポーツ行動の規定要因を探究した研究が多く行われている^{9) -16)}。しかし、多々納ら¹⁴⁾は「基礎的問題点として、従属変数としてのスポーツ活動の側面が軽視され、スポーツ活動の質と量、例えば、内容・頻度・程度あるいは技術水準が無視される傾向にある」と指摘しているように、これまでの多くの研究は、スポーツ目的論やスポーツ手段論の立場から説明がされてきており¹⁷⁾、また調査時点でのスポーツの実施、非実施を説明するものが多い。さらに、徳永ら^{15) 18) -20)}は人々のスポーツ行動を総合的に診断するテストの開発を目的に、将来のスポーツ行動を予測・診断するテストの開発を試みているが、これも同様に、ある一時点での人々のスポーツ行動を評価するものであり、スポーツ実施・継続行動を説明するものではない。金崎¹⁷⁾が「人はなぜスポーツするのか」という命題に対し、「比較的長期にわたるスポーツの継続的实施の説明となると、スポーツの目的論や手段論を超えたもっと別の視点からのアプローチが必要」と述べているように、スポーツ活動を、なぜ現時点で行っているか否かという単純な問いではなく、どうすれば活動に繋がるのかといった未来予測的な理論が求められている。そこで注目されたのがコミットメントの概念である。

コミットメントに関する研究²¹⁾はアメリカにおいて1960年代に始まっており、スポーツ社会学の分野でも取り上げられ、スポーツ行動の実施やその継続化を説明するのに有効であることが明らかになっている^{22) -25)}。Scanlan, T.K., et.al.²³⁾は、個人のスポーツ行動の実施や継続化を説明するのに有効な手段としてスポーツ・コミットメント理論を提唱し、スポーツ・コミットメントを「特定のスポーツプログラムへの参加または継続に対する願

望や決意を表している心理的な状態」と定義している。さらに、金崎¹⁷⁾は「スポーツへの傾倒、執着、結びつき、あるいはスポーツ行動やスポーツ集団に身を投入すること」と述べており、スポーツへのコミットメントが強く形成されている者ほど、スポーツとの結び付き、あるいはかかわりが深いことが明らかにされている。しかし、村上²⁶⁾は「運動行動に適用される理論・モデルは欧米の文化を背景とする土壌で構築されたものであり、これらがそのまま我が国の人々に適用できるとは限らない」と述べており、日本の文化や土壌にあった形に修正する必要性を指摘している。そこで、高峰ら²⁷⁾は Carmack and Martens²⁸⁾ のランニング・コミットメントの尺度項目を日本語訳し、ランニングという語をウォーキングに置き換え、ウォーキング・コミットメント尺度として調査を行っており、その尺度としての信頼性と妥当性を確認している。同様に、萩原ら²⁹⁾は、国際比較を実施する際の標準的な尺度の作成を検討するため、Scanlan,T.K.,et.al.^{22) 23)} のスポーツ・コミットメント尺度を援用し、競技スポーツに特化した日本語版尺度を作成しており、その信頼性と妥当性を確認している。いずれの先行研究^{27) 29)}も、スポーツ・コミットメントの得点が高い者ほど、そのスポーツ実施頻度が高いこと示している。コミットメントの援用や有用性についても研究が行われており、平野³⁰⁾が210名の大学生競技者を対象に、スポーツ・コミットメントの新たな概念構成と尺度作成を目的とした調査を行った結果、新たな尺度においてスポーツ・コミットメントの得点が高い者ほど、スポーツ実施頻度が高いことを示している。さらに、青少年（中学生、高校生）を対象にした調査³¹⁾や、大学生を対象にした調査¹⁷⁾、成人を対象にした調査³²⁾、そして高齢者を対象にした調査³³⁾など幅広い年代を対象に研究が行われている。全てにおいてスポーツ・コミットメントの得点の

高い者は、スポーツ実施頻度、継続経験、継続意図が高いことが示されており、スポーツ・コミットメントがスポーツ行動の実施や継続化を説明するのに有効な手段として捉えることができる。したがって、スポーツ・コミットメントを援用したスポーツ実施・継続行動の検討が有用である³⁴⁾といえる。

スポーツ・コミットメントの規定要因の検討も進められており、Scanlan,T.K.,et.al.²²⁾²³⁾は「スポーツの楽しさ (Enjoyment)」「参加の選択肢 (Involvement Alternatives)」「個人的な投資 (Personal Investments)」「社会的な制約 (Social Constraints)」「関与の機会 (Involvement Opportunities)」の心理的、社会的な 5 要因がスポーツ実施・継続に関連するスポーツ・コミットメントを規定しており、特に「スポーツの楽しさ (Enjoyment)」がスポーツ・コミットメントと強い関連性を示している。その他の要因の寄与を抑制している可能性があることから³⁴⁾、「スポーツの楽しさ (Enjoyment)」を他の要因の媒介変数として理論的に位置づけたスポーツ・コミットメントモデルも示されている²⁴⁾。しかし、萩原³⁴⁾は、「競技スポーツの場合において、楽しいという肯定的な自己感情のみがスポーツへの傾倒を示すものではない」と指摘しており、競技スポーツにおけるスポーツ・コミットメントの規定要因は、肯定的・否定的というような感情要因ではなく、様々な要因から検討することが必要と考えられる。わが国においても、スポーツ・コミットメントの規定要因に関する検討が進められている。萩原ら^{34) -37)}は、スポーツ・コミットメント形成につながるモデルの検討を行っており、社会的要因が心理的要因を媒介しスポーツ・コミットメントを形成する過程を明らかにしている。社会的要因では、スポーツ参加および、習慣化を説明するとしてソーシャルサポートに着目しており^{38) -40)}、心理的要因では、競

技者としての役割に対する同一性の程度を示す、競技者アイデンティティーに着目をして
いる^{41) -43)}。社会心理学分野でも、ソーシャルサポートとアイデンティティー確立の関連
性についても検討^{44) -46)}が行われており、ソーシャルサポートの認知が高い人ほど、アイ
デンティティーの程度が高いことが示されている。その中で、福岡ら⁴⁵⁾は発達的变化によ
る差があることを明らかにし、磯谷ら⁴⁶⁾は友人から受けるソーシャルサポートの認知が
アイデンティティーを男性より女性の方が形成しているということを明らかにしている。
近年では、個人・社会志向性を社会的要因とするモデルの検討⁴⁷⁾も行われているが、ソー
シャルサポートは「個人を取り巻く重要な他者からの有形・無形の援助」と定義されてお
り⁴⁸⁾、本研究では、主婦で女性でもあるママさんバレー実施者が、中断を余儀なくされた
状況から復帰するには、援助が必要になるという観点から、ソーシャルサポートを社会的
要因と捉えることとした。

以上のように、日本においてもスポーツ・コミットメントを規定する要因について検討
が進められている。村上²⁶⁾は「運動行動に関連していると思われる要因を用いて理論・モ
デルを構築し、その枠組みの中で検証することが必要」と述べており、萩原ら^{35) 37)}のよ
うに青年期を対象にしたスポーツ・コミットメントモデルの検討や、齊藤ら⁴⁹⁾の身体障害
者を対象にしたスポーツ・コミットメントモデルの検討などが行われているが研究の蓄積
が多いとはいえない。さらに、成人女性を対象に検討した研究は少なく、年代や立場によ
って参加を阻害する要因が異なることが考えられることから、職業婦人のようなバレーボ
ール以外に主たる業務や諸制約を抱える人のスポーツの実施・継続を向上させるためにも、
ソーシャルサポートに焦点をあてたモデルを、年代やスポーツ種目に幅広く用いて研究を

重ねていくことは重要であると考えられる。

1. 3 研究の目的

本研究では、ママさんバレーの実施者を対象に、ママさんバレーに関するソーシャルサポートの認知と競技者アイデンティティを媒介変数としたスポーツ・コミットメントの形成過程を明らかにする。本研究では萩原らのモデル³⁵⁾を仮説モデルとして用いる。さらに、本研究では、ママさんバレーへの参加中断経験の有無によるモデルの比較を行う。中断経験から復帰し、スポーツ実施・継続を促進するうえで重要な競技者アイデンティティの形成にはどのようなサポートが必要であることを明らかにすることは、参加を促進するためには重要であり、今後のスポーツ実施・継続に関する新たな知見を付加することができると考えられる。

第 2 章 研究方法

2. 1 調査項目

測定指標は、萩原ら^{35) 37)}が示したスポーツ・コミットメントモデルの測定項目に従い、菅ら⁵⁰⁾が開発したスポーツソーシャルサポート尺度、Brewer, B.W., et.al.⁵¹⁾が開発し磯貝ら⁴²⁾が和訳した競技者アイデンティティ尺度、Scanlan, T.K., et.al.^{22) 23)}が開発したスポーツ・コミットメント尺度を参考にした。それぞれの尺度の信頼性・妥当性については、先行研究において確認されている^{29) 42) 50)}。

2. 1. 1 予備調査および内容的妥当性の検討

調査項目については、ママさんバレーでの妥当性を確認するため、予備調査として東京都ママさんバレーボール連盟に登録されているママさんプレーヤー297名を対象に質問紙調査を行った。その後、スポーツマネジメントの専門家3名と、スポーツ政策を学ぶ学生6名、計9名によって、調査項目の内容的妥当性の検討、質問文の表現の検討、回答に対する評定方法の検討を行った。予備調査および、内容的妥当性の検討の結果、全ての項目において、「スポーツ」という表現を「ママさんバレー」に、「競技者」という表現を「プレーヤー」に変更し、5段階評定尺度に統一した。

2. 1. 2 測定尺度

スポーツソーシャルサポートの測定は、菅ら⁵⁰⁾によって開発された、手段的・情緒的サポートの6項目2因子構造の尺度を援用した。「一緒にスポーツをする仲間がいる」、「ス

スポーツに誘ってくれる仲間がいる」などの手段的サポートと、「スポーツをすることをすすめたり、ほめてくれる家族や仲間がいる」などの情緒的サポートの 2 因子で構成されている。尺度の信頼性はクロンバックの α 係数（手段的サポート：.86、情緒的サポート：.91）で確認され、妥当性は探索的因子分析および、確認的因子分析（GFI=.984、AGFI=.957、CFI=.989、RMSEA=.077）によって確認されている⁵⁰⁾。尺度は「全くそう思わない（得点 1）」から「かなりそう思う（得点 5）」までの 5 段階評定尺度である。サポートの機能的側面に着目しており、「スポーツ実施の際に家族や仲間などの自分を取り巻く身近な人々から得られる援助⁵⁰⁾」をどのように知覚しているかを評価でき、また、スポーツ実施に際して重要であることが示唆されている。さらに、本研究の対象はママさんであり、スポーツ参加を阻害する要因に関する研究⁶⁾があるように、ママさんにとってサポートは重要であることから、本尺度を援用した。なお、質問文の表現の検討の結果、尺度内の「スポーツ」という表現を、すべて「ママさんバレー」に変更した。

競技者アイデンティティの測定は、Brewer, B.W., et.al.⁵¹⁾によって作成された Athletic Identity Measurement Scale (AIMS) を、磯貝ら⁴²⁾が日本語版に翻訳した 7 項目 1 因子構造の AIMS-J を援用した。「私には、スポーツに関する目標がいくつもある」、「スポーツは、私の生活の中で最も大切なものである」などの項目で構成されている。尺度の信頼性はクロンバックの α 係数（日本語版：.79）で確認され、妥当性は探索的因子分析および、検証的因子分析（GFI=.949、CFI=.918、IFI=.92）によって確認されている⁴²⁾。尺度は「全く違う（得点 1）」から「全くその通り（得点 7）」までの 7 段階評定尺度である。米国の尺度を日本人、且つ、スポーツ実施者を対象に開発されていることから、本尺度を援用し

た。なお、質問文の表現の検討の結果、尺度内の「スポーツ」という表現を、すべて「ママさんバレー」に変更し、回答に対する評定方法の検討の結果、尺度はスポーツソーシャルサポートと同様の「全くそう思わない（得点 1）」から「かなりそう思う（得点 5）」までの 5 段階評定尺度に変更した。Brewer,B.W.,et.al.⁵¹⁾ によって作成されたアイデンティティ尺度は、「Athletic Identity Measurement Scale (AIMS)」と表現されており「個人がスポーツ選手役割と自分を同一視する程度」と定義されている。ママさんバレーはママさんが楽しむレクリエーションスポーツの代表⁵²⁾とされているため、本研究で使用する尺度に関しては、「競技者」ではなく「プレーヤー」と表現することとした。

スポーツ・コミットメントの測定は、Scanlan,T.K.,et.al.^{22) 23)} によって作成された 6 項目 1 因子構造の尺度を援用した。「How dedicated are you to playing in (program)?」（あなたはあなたが行っているスポーツにどのくらい、打ち込んでいますか?）、「How determined are you to keep playing in (program)?」（あなたは、あなたが行っているスポーツを継続することに、どのくらい強い決意を持っていますか?）などの項目で構成されている。萩原ら²⁹⁾が日本語版スポーツ・コミットメント尺度の弁別力を検討するために、Scanlan,T.K.,et.al.^{22) 23)}の尺度を訳し戻し法を用いて翻訳し検証しており、尺度の信頼性はクロンバックの α 係数（.79）で確認され、妥当性は探索的因子分析および、検証的因子分析（GFI=.989、AGFI=.971、CFI=.988、RMSEA=.058）によって確認されている。尺度はそれぞれの質問項目に合わせ回答が設定されており、5 段階評定尺度である。例えば“How dedicated are you to playing in (program)?”に対しては、「1: not at all dedicated」から「5: very dedicated」となっており、“How determined are you to keep playing in

(program)?” に対しては「1 : not at all determined」から「5 : very determined」となっている。金崎はこれまでに青少年³¹⁾、大学生¹⁷⁾、高齢者³³⁾を対象にしてスポーツ・コミットメントに関する研究を行ってきたが一般人を対象にしており、一方、Scanlan,T.K.,et.al.^{22) 23)}はスポーツに特化した尺度であり、個人の時間的投資、継続意図などからスポーツ・コミットメントの程度を評価する²⁹⁾ことから、本尺度を援用した。なお、尺度内の(program)は個人が行っているスポーツとして置き換えることができるため、すべて「ママさんバレー」に変更した。

2. 2 調査実対象者および手続き

調査対象は、第 40 回記念やまゆり杯・小田急争奪「神奈川県家庭婦人バレーボール大会」参加チーム（586 チーム、6662 人）のうち、神奈川県ママさんバレーボール連盟登録者 350 名であった。神奈川県で最も規模の大きい大会で、神奈川バレーボール連盟に未登録チーム（クラブチーム）も参加できることから、実態の把握できている神奈川県ママさんバレーボール連盟登録チームから抽出した。対象者への調査依頼は、最終的に回答が得られる目標対象者数を 350 名とし、500 名に対して行った。回収は 431 通で回収率は 86.2%であった。分析に用いる項目が完全回答でなかった調査票を除外した結果、有効回答数は 339 通となり、有効回答率は 67.8%であった。

調査方法は、質問紙郵送法によって実施した。調査対象者には、①「調査内容の趣旨の説明」、②「個人情報取り扱いについて十分配慮すること」を書面にて説明した。質問紙は大会開会式に返信用封筒とともに配布した。回収期間は 2015 年 11 月 12 日～11 月 30

日とした。

2. 3 分析方法

ママさんバレーにおけるスポーツ・コミットメントモデル³⁵⁾の妥当性を検討するために共分散構造分析を実施した。まず、それぞれの尺度の収束的妥当性を確認した後に、モデルの適合度を確認した。2 因子構造のスポーツソーシャルサポート尺度では弁別的妥当性を確認した。収束的妥当性と弁別的妥当性には Average Variance Extracted (AVE)、モデルの適合度指標は Comparative Fit Index (CFI)、Root Mean Square Error of Approximation (RMSEA)、尺度の信頼性は Cronbach の α 係数を使用した。その後、中断経験有無のモデルの差異を明らかにするため、中断経験有モデルと中断経験無モデルに対して、多母集団による同時分析を実施した。検討手順は、小塩⁵³⁾、豊田^{54) 55)}の方法に準拠し、母集団毎の分析、配置不変性の検討、等値制約の順で実施した。モデルの適合度指標は Comparative Fit Index (CFI)、Root Mean Square Error of Approximation (RMSEA)、Akaike's Information Criterion (AIC) を使用した。

AVE は、尺度を構成する各項目の標準化推定値を 2 乗し、その合計値を項目数で割ることで算出される。基準値とされる値は .50 以上⁵⁶⁾とされている。また、弁別的妥当性とは、因子間の相関係数の平方と AVE を比較検討することで検証される⁵⁶⁾。CFI はモデルが適合するためには、1 に近いほどモデルの説明力があるとされ、一般的に .90 以上が当てはまりの良いモデルの判断基準とされている⁵³⁾。また、RMSEA は 0 に近いほど良いとされ、.08 以下であればモデルの適合が好ましく、.10 以上で当てはまりが悪いとされる⁵⁷⁾。

Cronbach の α 係数は一般的に .80 以上とされており、.50 を切るような尺度は再検討すべきとされている⁵⁸⁾。AIC は値が小さいほど良いモデルとされている⁵⁴⁾。統計解析パッケージは IBM SPSS Statistics23.0 および AMOS22.0 を使用した。

第3章 結果

3. 1 調査対象者の特性

表1に、調査対象であるママさんバレー実施者を、「中断経験あり」と「中断経験なし」に分類し属性をまとめた。中断経験は、1カ月以上（練習：月10回以上に相当）ママさんバレーに参加できなかったことを分類の基準とした。その結果、「中断経験あり」は全体の61.1%（n=207）、「中断経験なし」は38.9%（n=132）を占める値となった。

具体的な特性について、【年齢】でみると、最も多いのは40～49歳で、「中断経験あり」が42.5%（n=88）、「中断経験なし」が42.4%（n=56）と半数近くを占めていた。【年齢】で中断経験の有無に有意な差は認められなかった（ $\chi^2=6.573, df=4, n.s.$ ）。【職業有無】をみると、最も多いのは有職（パート・アルバイト）で、「中断経験あり」が56.5%（n=117）、「中断経験なし」が55.3%（n=73）と半数以上を占めていた。【職業有無】においても中断経験の有無に有意な差は認められなかった（ $\chi^2=3.628, df=2, n.s.$ ）。次に、【末子年齢】をみると、最も多いのは高校生以上で、「中断経験あり」が52.2%（n=108）、「中断経験なし」が44.7%（n=59）と半数近くを占めていた。「中断経験あり」では未就学児が、「中断経験なし」では子どもなしと小学生が有意に多く、【末子年齢】では中断経験の有無に1%水準で有意な差が認められた（ $\chi^2=13.583, df=4, p<.01$ ）。【バレー開始】をみると、22歳以下が半数以上（63.7%）を占めていた。「中断経験あり」では22歳以下が、「中断経験なし」では23歳以上が有意に多く、【バレー開始】では中断経験の有無に5%水準で有意な差が認められた（ $\chi^2=6.620, df=1, p<.05$ ）。中断理由（複数回答）では、出産・育児の回答数が一番多く、次いで怪我、引っ越しの順序であった。

表1 調査対象者の特性(神奈川県)

		全体	中断経験あり		中断経験なし		χ^2 値	p値
			度数	%	度数	%		
【実施者】		339	207	61.1%	132	38.9%		
【年齢】	20～29歳	3.2%	6	2.9%	5	3.8%	6.573	n.s.
	30～39歳	13.9%	26	12.6%	21	15.9%		
	40～49歳	42.5%	88	42.5%	56	42.4%		
	50～59歳	30.1%	59	28.5%	43	32.6%		
	60歳以上	10.3%	28	13.5%	7	5.3%		
平均		47.3歳						
【職業有無】	有職(フルタイム)	25.7%	47	22.7%	40	30.3%	3.628	n.s.
	有職(パート・アルバイト)	56.0%	117	56.5%	73	55.3%		
	専業主婦	18.3%	43	20.8%	19	14.4%		
【末子年齢】	子どもなし	5.3%	7	3.4%	11	8.3%	13.583	**
	未就学児	12.7%	33	15.9%	10	7.6%		
	小学生	20.1%	33	15.9%	35	26.5%		
	中学生	12.7%	26	12.6%	17	12.9%		
	高校生以上	49.3%	108	52.2%	59	44.7%		
【バレー開始】	22歳以下	63.7%	143	69.1%	73	55.3%	6.620	*
	23歳以上	36.3%	64	30.9%	59	44.7%		
【中断理由】 複数回答	出産・育児	45.7%						
	怪我	26.8%						
	引っ越し	8.0%						

n.s.: 非有意 *: $p<.05$ **: $p<.01$

3. 2 共分散構造分析を用いたスポーツ・コミットメントモデルの検討

萩原ら³⁵⁾のスポーツ・コミットメントモデルをママさんバレーに用い、共分散構造分析を行った。本研究で用いたモデルに対して適合度を検証した結果、CFI=.875、RMSEA=.079であった。次に、収束的妥当性を支持するAVEを算出した結果、手段的サポートが.53で情緒的サポートが.57の値を示した。プレーヤーアイデンティティーとスポーツ・コミットメントで基準の.50を下回ったため、内容的妥当性に配慮しながら標準化推定値の低い項目を削除した結果、プレーヤーアイデンティティーが.50(7項目から4項目)でスポーツ・コミットメントが.52(6項目から4項目)となり、尺度の収束的妥当性が確認された。修正後の尺度を用い、再度モデルに対して適合度を検証した結果、CFI=.906、RMSEA=.087であった。RMSEAが.08を上回ったが、.10未満のため⁵⁷⁾、モデルの適合

度は許容可能な値と判断しその後の分析を進めた。

スポーツソーシャルサポート尺度は2因子について、弁別的妥当性の検証を行った。その結果、2因子の AVE は相関係数 ($r=.71$) の平方よりも高い値であることを確認し、弁別的妥当性を示すことができた。

すべての標準化したパス係数は手段的サポートからプレーヤーアイデンティティのパスを除き、情緒的サポートからプレーヤーアイデンティティは.57、プレーヤーアイデンティティからスポーツ・コミットメントは.82 とそれぞれ 0.1%水準で有意であった。また、決定係数 (R^2) はプレーヤーアイデンティティで.27、スポーツ・コミットメントで.68 であった (図 2)。

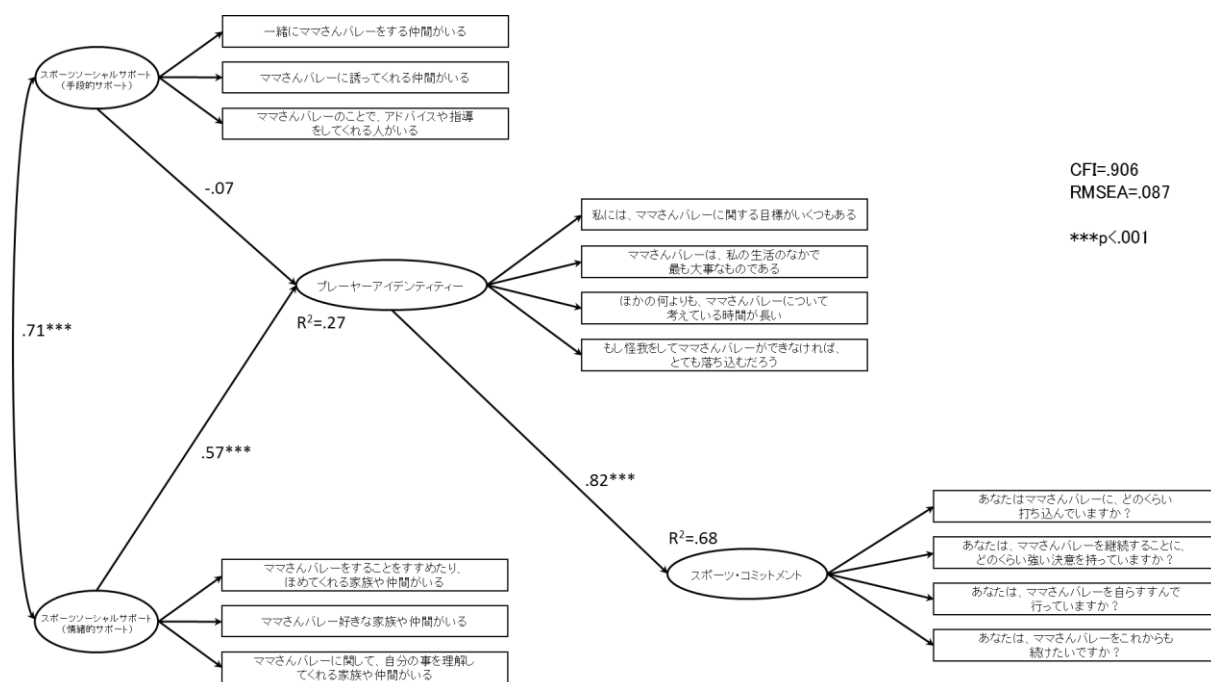


図2 ママさんバレーにおけるスポーツ・コミットメント形成モデル

それぞれの尺度の信頼性については Cronbach の α 係数を算出し、手段的サポート因子.68、情緒的サポート因子.79、プレーヤーアイデンティティ.78、スポーツ・コミット

メント.81 で、概ね良好な値を得ることができた。手段的支持で.70 の基準を下回ったが、質問数が少ないためと考えられる⁵⁸⁾。

3. 3 多母集団による同時分析の結果

本研究では、様々な理由で中断を余儀なくされ、継続することに困難な条件であるにも関わらず、復帰をしている実施者がいるため、中断経験の有無に着目した。そこで、多母集団の同時分析を行い、中断経験有無のモデルの比較を実施した。潜在変数間について同じ構造を各モデルに仮定しているため、推定値の違いのみを想定する配置不変性を仮定したモデルの検討を行った。まず、それぞれのモデルの適合に問題がないかを確認するため、中断経験有無のモデルについて、母集団毎の分析を行った。その結果、中断経験有のモデルは CFI=.887、RMSEA=.093 となり、中断経験無のモデルは CFI=.891、RMSEA=1.101 であった。両モデルにおいて、CFI が.90 を下回ったが、これは観測変数が多くなればと値が低くなる⁵⁹⁾ため、本研究では許容範囲であると判断した。中断経験無モデルの RMSEA の値において許容範囲を超えたが、「この段階で適合が悪かったとしても、次の手順の分析で集団を同時に分析することで適合度が向上する場合もあるため、ここで分析を中断はしない方がよい⁵⁹⁾」とされており、次の手順に進み、各モデルの配置不変性の検討を行った。中断経験の有無における多母集団の共分散構造分析を実施した結果、モデルの適合度は CFI=.888、RMSEA=.068 となり、許容可能な値を示した。本研究で用いたモデルの構造で、配置不変性（等値制約なし）を確認したため、さらに、モデルの配置不変の妥当性を検討するため、パス係数に等値制約を置いたモデルを設定し、モデルにおける集団の異質

性、等質性を検討した。設定したモデルはモデル1（配置不変モデル）、モデル2（共分散、情緒的サポートからプレーヤーアイデンティティー、プレーヤーアイデンティティーからスポーツ・コミットメントの3つのパスに等値制約）、モデル3（全てのパスに等値制約）であった。3つのモデルの適合度指標は表2のとおりである。

表2 各モデルに対する共分散構造分析の主な結果			
	CFI	RMSEA	AIC
モデル1	888	.068	500.798
モデル2	873	.072	529.745
モデル3	870	.072	531.290

表2からモデル1のCFI、RMSEAの適合度が最も良好であり、さらにモデルの安定度を示すAICの値が最も低かったため、最終的にこのモデル1を採択した。この結果から、スポーツソーシャルサポートに基づいたプレーヤーアイデンティティーの形成、そして、スポーツ・コミットメントにつながるモデルについては中断経験の有無で異質性を考慮することは妥当であると判断された。すなわち、本研究で用いたモデルは推定値の違いを想定する配置不変性を仮定した。

スポーツソーシャルサポート尺度の手段的サポートと情緒的サポートとの関係は、中断経験有モデルでは（ $r=.74$ 、 $p<.001$ ）、中断経験無モデルでは（ $r=.65$ 、 $p<.001$ ）となり、両モデルとも有意であることが示された。また、両モデルの手段的サポートと情緒的サポートのパスのパラメータ間の差の検定を行ったところ、有意差が認められた（ $t=3.55$ 、 $p<.001$ ）。すなわち、スポーツソーシャルサポートを構成する手段的サポートと情緒的サポートには関連性が認められ、また、中断経験の有無によって差があることが明らかになった。

スポーツソーシャルサポートからプレーヤーアイデンティティへの影響は、中断経験有モデルでは、情緒的サポートからのみプレーヤーアイデンティティへのパスが有意であると示され（パス係数：.61、 $p<.001$ ）、中断経験無モデルでも、同じく情緒的サポートからのみプレーヤーアイデンティティへのパスが有意であると示された（パス係数：.39、 $p<.01$ ）。また、両モデルの情緒的サポートからプレーヤーアイデンティティへのパスのパラメータ間の差の検定を行ったところ、有意差が認められた（ $t=2.85$ 、 $p<.001$ ）。すなわち、実施に際して、ママさんバレーでは情緒的なサポートが、プレーヤーとしてのアイデンティティを形成しており、また、中断経験の有無で差があることが明らかになった。

プレーヤーアイデンティティからスポーツ・コミットメントへの影響は、中断経験有モデル（パス係数：.76、 $p<.001$ ）、中断経験無（パス係数：.94、 $p<.001$ ）となり、両モデルとも有意であることが示された。また、両モデルのプレーヤーアイデンティティからスポーツ・コミットメントへのパスのパラメータ間の差の検定を行ったところ、有意差が認められた（ $t=2.75$ 、 $p<.001$ ）。すなわち、プレーヤーとしてのアイデンティティがスポーツ・コミットメントと深く関連し、また、中断経験の有無で差があることが明らかになった（図3）。

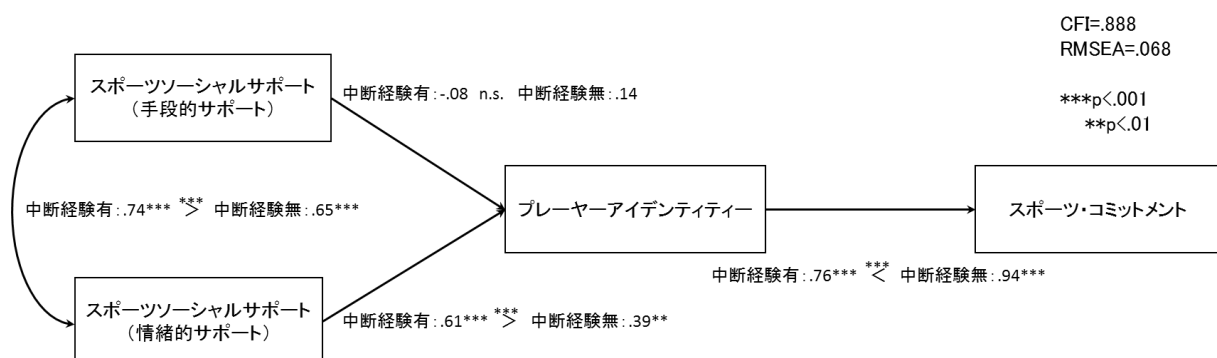


図3 多母集団における同時分析結果

第4章 考察

4. 1 中断経験の有無による調査対象者の特性

中断経験の有無で、【年齢】や【職業有無】に差は認められなかったが、【末子年齢】と【バレー開始】では有意な差が認められた。【末子年齢】では、全体の実施者の94.7%に子どもがおり、【職業有無】でも81.7%が有職者であることから、出産や育児、家事、さらに仕事をしながらもママさんバレーを実施していることが明らかになった。【末子年齢】で、松永ら⁶⁾が指摘するスポーツ参加に対する阻害要因を生み出している子育て期(6歳以下)の未就学児が、「中断経験あり」のほうが有意に多くなっており、中断経験は【末子年齢】と関連していることが示唆された。

また、【バレー開始】では、「中断経験なし」のほうが23歳以上で有意に多くなっており、中断経験は【バレー開始】と関連していることが示唆された。子育て期を過ぎたことによって阻害要因が緩和されたり、小学校のPTAや子どもがバレーボールをしたりしていることなどがきっかけで、年齢的にも落ち着いてからママさんバレーを初めて経験していることが推察される。実施者の94.7%に子どもがいるのに対し、「中断経験なし」が全体の38.9%と多めだが、これらの理由で中断を経験していないという結果になった可能性が考えられる。

4. 2 ママさんバレーにおけるスポーツ・コミットメントモデル

本研究では、競技スポーツ参加・継続に関する要因を検討することを目的に構築されたスポーツ・コミットメントモデル³⁵⁾を仮説モデルとし、ママさんバレーに用いて検討する

こと。また、中断経験有無の両モデルの比較を行い、モデル間にどのような差があるか検討することを目的とした。

本研究で仮説モデルについて検討した結果、標準化したパス係数の中で手段的サポートからプレーヤーアイデンティティへのパスを除いたすべてパス係数の数値が有意であると判断され、また、使用したモデルの妥当性が示された。先行研究³⁵⁾では、男女のモデルで多母集団の同時分析を行い、スポーツソーシャルサポートから競技者アイデンティティへのパスの検討を行っており、女性競技者では情緒的サポートのみ競技者アイデンティティへ有意な影響を与えていることが示されている。よって、本研究は先行研究を支持する結果となった。さらに磯谷ら⁶⁰⁾は、成人女性は友人などの非血縁者からのサポートが自己のアイデンティティ形成を高めることを明らかにしている。また、プレーヤーアイデンティティとスポーツ・コミットメントの関係においても、プレーヤーとしてのアイデンティティを強く形成していれば、コミットメントの程度が高まるという関連が明らかになり、先行研究^{35) 61)}を支持する結果となった。以上の研究を踏まえ、ママさんバレーにおいて情緒的なサポートを、血縁者である家族からはもちろんのこと、非血縁者であるチームメイトの身近な人などからも日常的に行なうことが、ママさんバレープレーヤーとしての自己を形成し、スポーツの実施・継続行動に関連のあるコミットメントを高めるという可能性が示唆された。しかし、決定係数 (R^2) をみると、心理的要因であるプレーヤーアイデンティティがスポーツ・コミットメントの約 68%を説明できるのに対し、社会的要因であるスポーツソーシャルサポートはプレーヤーアイデンティティの約 27%の説明力と若干低くなっており、社会的要因として捉えたスポーツソーシャルサポート以

外の他の要因も多くある可能性が示唆された。

4. 3 中断経験による多母集団の同時分析

中断経験有無のモデルを検討するため、多母集団の同時分析を実施した結果、スポーツソーシャルサポート、情緒的サポートとプレーヤーアイデンティティー間、プレーヤーアイデンティティーとスポーツ・コミットメント間でモデルの差異を確認することができた。

まず、スポーツソーシャルサポートについては菅ら⁵⁰⁾の尺度を援用し検討を行った結果、手段的サポートと情緒的サポートに強い相関が認められ、手段的サポートと情緒的サポートの関係においてパラメータ間の差の検定を行ったところ、中断経験有モデルの方が中断経験無モデルより強い相関が示された。すなわち、ママさんバレーでも、ソーシャルサポートを構成する手段的サポートと情緒的サポートの関連性が高いことが示され、さらに中断経験のある人の方が手段的なサポートおよび情緒的なサポートの関連性が高いことが明らかになった。ママさんバレー実施者は主婦であり、本調査では出産・育児などが主な中断理由になっている（表 1）。日本女性は主婦役割の中でも母親役割を重視⁶²⁾しており、スポーツの参加に対し、出産時はもちろんのこと末子年齢によって社会心理的阻害要因があること⁶³⁾が明らかにされている。さらに、松永ら⁸⁾は子どもを預けることへの罪悪感や子どもに対する心配など母親の複雑な心情があり、特に末子年齢が低いとその傾向も強いことを明らかにしている。中断経験が過去の事であることで解釈に注意が必要であるが、【末子年齢】でみると、「中断経験あり」では未就学児が多くなっており（表 1）、中断からの復帰には子どもの育児への負担軽減が影響している可能性も考えられる。この

ように、特にママさんバレーを中断した経験のある人は、身近な周りの人からの手段的サポートや情緒的サポートを受けて復帰した過去の経験が、中断経験の有無で差を生じさせたと考えられる。

次に、情緒的サポートとプレーヤーアイデンティティーの関係においては、情緒的サポートがプレーヤーアイデンティティーへ影響を与えており、パラメータ間の差の検定を行ったところ、中断経験有モデルの方が中断経験無モデルより影響が強いことが示された。

すなわち、ママさんバレーでは、ソーシャルサポートのうち情緒的サポートのみがプレーヤーアイデンティティーへ影響を及ぼしており、さらに中断経験のある人の方が「スポーツをすることをすすめたり、ほめたりしてくれる家族や仲間がいる」などの情緒的なサポートの認知がより強くママさんプレーヤーとしての自己を形成しているということが明らかになった。ソーシャルサポートと競技者アイデンティティー形成においては関連性があること^{35) 45) 46)}や性別に差があること⁴⁶⁾が先行研究で明らかになっている。特に、磯谷ら⁴⁶⁾は女性の特徴として、信頼できる交流を基盤として自己への信頼が高まり、周囲から阻害されていないことが自我同一性を確立させる上で重要であることを示唆している。内海⁵⁾が、ママさんバレーは、子育てとは違う新たな人間関係であり、新たなコミュニティの形成だと述べているように、ママさんバレーへの参加動機として「みんなで集まることが好き」などの集団帰属志向などがある⁶⁴⁾。そのため、中断によってママさんバレーというコミュニティから離れた際に、チームメイトからの「また一緒にバレーをしよう」などの誘いが、ママさんバレープレーヤーである自己を再認識し、強くその役割を形成することに影響している可能性があり、中断経験の有無で情緒的サポートとプレーヤーアイデンテ

ィティの關係に差が生じたと考えられる。

また、プレーヤーアイデンティティとスポーツ・コミットメントの關係においては、プレーヤーアイデンティティがスポーツ・コミットメントへ影響を与えており、パラメータ間の差の検定を行ったところ、中断経験無モデルの方が中断経験有モデルより影響が強いことが示された。すなわち、ママさんバレーでも、アイデンティティとコミットメントに強い関連性が認められ、さらに、中断経験のない人の方がママさんプレーヤーとして認知している自分が、スポーツ行動の実施や継続化を説明するのに有効なコミットメントをより強く形成していることが明らかになった。すでに競技者アイデンティティを有する者は、スポーツ・コミットメントを強く形成していることは先行研究^{35) 61)}でも明らかになっている。ママさんバレーにおいて、中断した経験のない人は、ある人に比べると参加しやすい環境にいる可能性があるため、中断経験の有無で差が生じたと考えられる。

第5章 結論

5. 1 まとめ

ママさんバレーにおいて、萩原ら³⁵⁾のスポーツ・コミットメントモデルを用いて検討した結果、収束的妥当性の確認によりプレーヤーアイデンティティ尺度が7項目から4項目とスポーツ・コミットメント尺度が6項目から4項目となった。その後、共分散構造分析により検証し、スポーツ実施に関するソーシャルサポートの認知と競技者アイデンティティを媒介変数としたスポーツ・コミットメントを形成するモデル³⁵⁾と同様な結果を導くことができた。また、女性において「競技者アイデンティティを強く形成するためには、他者からの情緒的サポートの認知が重要である³⁵⁾」という先行研究を支持する結果になった。しかし、社会的要因として捉えたスポーツソーシャルサポート以外の他の要因も心理的要因であるプレーヤーアイデンティティに影響を与えていることが示唆された。

中断経験の有無がどのような違いを生じさせるかを、多母集団による同時分析により検証した結果、スポーツソーシャルサポート、情緒的サポートとプレーヤーアイデンティティ間、プレーヤーアイデンティティとスポーツ・コミットメント間でモデルの差異を確認することができた。スポーツソーシャルサポートでは、中断経験のある人の方が、手段的サポートと情緒的サポートの関連性が高いという差異が明らかになり、また、情緒的サポートとプレーヤーアイデンティティ間においても、中断経験のある人の方が、情緒的なサポートの認知がより強くママさんプレーヤーとしての自己を形成しているという差異が明らかになった。逆に、プレーヤーアイデンティティとスポーツ・コミットメント間では、中断経験のない人の方が、スポーツ行動の実施や継続化を説明するのに有効なコ

ミットメントをプレーヤーアイデンティティがより強く形成していることなどの差異が明らかになった。

ママさんバレー実施者の減少に歯止めをかけ、チーム数を維持するためには、継続して実施してもらわなければいけない。そのため、現在、中断を余儀なくされた状況から復帰をした実施者の体験から、スポーツすることを「すすめる」「ほめる」そして「理解をする」などの情緒的なサポートが重要であるといえる。そして、それらをママさんバレーに関わる身近な他者が日常的に行う事によって、彼女たちのママさんバレープレーヤーとしての自己を形成し、ママさんバレーの実施・継続化につながる可能性が示唆される。本研究で明らかになった結果は、わが国のママさんスポーツおよびスポーツ実施・継続に関する新たな知見を付加できたと考える。

5. 2 研究の限界・課題

本研究の対象者はママさんバレーボール連盟に登録された人たちであり、現在ママさんバレーに参加している人たちであった。すなわち、本研究は過去に中断経験した時の体験を聞いているため、現在中断している人がどのようなサポートを求めているかについては全く言及できない。ママさんバレーボール連盟に登録していない実施者もいるため、そのような人においても同様に全く言及できない。また、本研究においては、一時点での人々のスポーツ行動を評価しただけに過ぎず、今後は、スポーツの実施・継続に関する研究データの集積と縦断的調査が必要である。また、現在中断している人を含めて検証することで、具体的なサポートや復帰までのプロセスなどの知見が得られると考えられる。本研究

で用いた尺度においても、若干の修正を試みたが、各スポーツや状況に合わせた新たな尺度を開発し、それらを用いた検証が必要となる。さらに、本研究では、スポーツ実施・継続を説明するために、スポーツ・コミットメントモデルを用いたが、岡ら⁶⁵⁾は、身体活動を心理的要因、社会的要因、環境的要因から検討し、松永ら⁸⁾もサポート・社会心理的要因は施設・サービス要因とも深く関係することを示唆している。ママさんバレーへの実施阻害要因も出産・育児だけでなく、女性の有職率も高いことから（表 1）、スポーツ実施・継続を説明するためには多くの視点から捉え検証を重ねていく必要があると考えられる。

注

（注 1）ママさんバレーの登録規定は、基本的に各都道府県のママさんバレー連盟ごとに定められており、近年は実施者減少の対策として規制緩和が進んでいる。例えば神奈川県
の登録規定では大原則として既婚者となっているものの、45歳以上の未婚者も登録可能
となっており、さらに大会ごとでも参加規定が違っている。

引用・参考文献

- 1) 高岡治子；家庭婦人スポーツ活動における「主婦性」の再生産：ママさんバレーボールの発展過程と制度特性を中心に、体育学研究 Vol.53,pp.391-407,2008.
- 2) 林喜美子；家庭婦人バレーボール選手の体力に関する研究、和洋女子大學紀要第2分冊家政系編 Vol.25,p.283,1984.
- 3) 内閣総理大臣官房広報室；スポーツに関する世論調査 10月 pp.10-11,1972.
- 4) 一般社団法人全国ママさんバレーボール連盟；一般社団法人全国ママさんバレーボール連盟連盟について、1979,<http://www.mamasan-volley.jp/about/soshiki.html>.
(情報取得 2015/12/29)
- 5) 内海和雄；「ママさんバレー」の実態と意義、一橋論叢 Vol.125,pp.115-131,2001.
- 6) 松永敬子，他；女性のスポーツ参与阻害要因に関する研究Ⅰ：6歳以下の子供を持つ母親のスポーツ参加について、大阪体育大学紀要 Vol.36,pp.71-83,2005.
- 7) 内閣府男女共同参画局；第1部男女共同参画社会の形成の状況：共働き等世帯数の推移、2013,<http://www.gender.go.jp/about/danjo/whitepaper/h25/zentai/html/zuhyo/zuhyo01-02-19.html>.
(情報取得 2015/12/29)
- 8) 内閣府；平成18年版国民生活白書：第2章女性のライフサイクルと就業、2006
http://www5.cao.go.jp/seikatsu/whitepaper/h18/10_pdf/01_honpen/pdf/06ksha0202.pdf.
(情報取得 2016/1/3)
- 9) 池田勝，他；勤労青少年のスポーツ実施を規定する要因の分析、日本体育学会大会号 No.27,p.112,1976.
- 10) 荒井貞光，松田泰定；スポーツ行動に関する実証的研究(2)、体育学研究 Vol.22,pp.137-152,1977.
- 11) 小椋博，影山健；労働要因がスポーツ参与に及ぼす影響の分析：重回帰モデルによる計量的研究、体育学研究 Vol.22,No.5,pp.311-319,1978.

- 12) 糸野豊, 他 ; パス解析によるスポーツ参加の分析、筑波大学体育科学系紀要 No.2,pp.23-30,1979.
- 13) 松田泰定, 他 ; スポーツ行動に関する実証的研究(3) : スポーツ種目選択行動について、体育學研究 Vol.24,No.1,pp.1-11,1979.
- 14) 多々納秀雄, 厨義弘 ; スポーツ参加の多変量解析(I) : 数量化理論第 II 類による要因分析、健康科学 Vol2,p.104,1980.
- 15) 徳永幹雄, 他 ; スポーツ行動の予測因子としての行動意図・態度・信念に関する研究 (I) : ランニング実施に対する Fishbein の行動予測式の適用、体育學研究 Vol.25,No.3,pp.179-190,1980.
- 16) 徳永幹雄, 他 ; スポーツ行動の予測因子としての行動意図・態度・信念に関する研究(II) : ランニング実施者と非実施者の諸属性の比較、健康科学 Vol.2,pp.91-101,1980.
- 17) 金崎良三 ; スポーツ・コミットメントの形成とスポーツ参加に関する研究 (1) : スポーツにおける友人関係によるコミットメント尺度作成の試み、健康科学 Vol.14,pp.35-42,1992.
- 18) 徳永幹雄, 他 ; スポーツ行動診断検査の試案、健康科学 Vol.4,pp.105-118,1982.
- 19) 徳永幹雄, 他 ; スポーツ行動の予測因子に関する研究(3) : 男女別・年代別の比較、健康科学 Vol.6,pp.129-140,1984.
- 20) 徳永幹雄, 他 ; スポーツ行動診断検査(DISC.1)の作成、健康科学 Vol.6,pp.113-27,1984.
- 21) Becker,H.S. ; Notes on the concept of commitment,American journal of Sociology.,pp.32-40,1960.
- 22) Scanlan,T.K.,et.al. ; The Sport Commitment Model : Measurement development for the youth-sport domain,Journal of Sport & Exercise Psychology., Vol.11,pp.54-64,1993.
- 23) Scanlan,T.K.,et.al. ; An introduction to the sport commitment model,Journal of Sport & Exercise Psychology.,Vol.15,pp.1-15,1993.
- 24) Weiss,M.R.,et.al. ; Determinants of sport commitment among junior tennis players: Enjoyment as a mediating variable,Pediatric Exercise Science.,Vol.13,No.2,pp.131-144,2001.

- 25) Scanlan,T.K.,et.al. ; Project on elite athlete commitment (PEAK): II. A direct test and expansion of the sport commitment model with elite amateur sportsmen,Journal of Sport and Exercise Psychology,Vol.25,No.3,pp.377-401,2003.
- 26) 村上雅彦；運動継続：社会学レビュー、体育の科学 Vol.55,pp.12-13,2005.
- 27) 高峰修，守能信；ウォーキング・コミットメント尺度の作成と検討：ランニング・コミットメント尺度を適用して、中京大学体育学論叢 Vol.38,No.2,pp.31-36,1997.
- 28) Carmack,M.A. and Martens,R. ; Measuring commitment to running: A survey of runners' attitudes and mental states,Journal of Sport Psychology,Vol.1,No.1,pp.25-42,1979.
- 29) 萩原悟一，磯貝浩久；競技スポーツにおけるコミットメントの検討、スポーツ心理学研究 Vol.41,No.2,pp.131-142,2014.
- 30) 平野貴也；スポーツコミットメント尺度の作成：信頼性及び妥当性の検討、名桜大学総合研究 No.22,pp.9-16,2013.
- 31) 金崎良三，橋本公雄；青少年のスポーツ・コミットメントの形成とスポーツ行動の継続化に関する研究－中学生・高校生を対象に（資料）－、体育学研究 Vol.39,No.5,pp.363-376,1995.
- 32) 金崎良三；Studies on sport commitment and involvement in Japan: Results and issues.研究論文集/佐賀大学文化教育学部 Vol.3,No.1,pp.241-249,1998.
- 33) 金崎良三；スポーツ・コミットメント尺度の検証：高齢者を対象に、佐賀大学文化教育学部研究論文集 Vol.6,No.2,pp.239-247,2002.
- 34) 萩原悟一；スポーツ・コミットメント形成モデルの構築-ソーシャルサポートの授受と競技者アイデンティティーの関連を基軸として、九州工業大学博士学位論文、2014.
- 35) 萩原悟一，磯貝浩久；スポーツ・コミットメントの形成に関する競技者アイデンティティーとソーシャルサポートの検討、スポーツ産業学研究 Vol.23,No.2,pp.227-239,2013.
- 36) 萩原悟一，磯貝浩久；ソーシャルサポートの授受と競技者アイデンティティーの関連に着目した

スポーツ・コミットメント形成モデルの検討、運動とスポーツの科学 Vol.20,No.1,pp.67-75,2014.

37) 萩原悟一，磯貝浩久；スポーツにおける個人・社会志向性と競技者アイデンティティの関連を基軸としたスポーツ・コミットメントモデルの検討、スポーツ産業学研究 Vol.24,No.1,pp.7-15,2014.

38) 板倉正弥，他；成人の運動行動と運動ソーシャルサポートの関係、ウォーキング研究 No.7,pp.151-158,2003.

39) 板倉正弥，他；運動ソーシャルサポートおよびウォーキング環境認知と身体活動・運動の促進との関係、体力科学 Vol.54,No.3,pp219-227,2005.

40) 萩原悟一，磯貝浩久；スポーツチームにおけるソーシャルサポート提供：受領尺度作成の試み、スポーツ産業学研究 Vol.24,No.1,pp.49-62,2014.

41) 奥田愛子，中込四郎；スポーツマン的アイデンティティの志向性と職業決定行動との関係、体育学研究 Vol.37,No.4,pp.393-404,1993.

42) 磯貝浩久，他；競技者アイデンティティに関する研究—評価尺度の作成と性、文化、競技レベル、動機づけとの関係—、財団法人ミズノスポーツ振興会 2001 年度研究助成金研究成果報告書、2001.

43) 萩原悟一，磯貝浩久；競技者アイデンティティに関する研究：日本語版尺度の再検討および競技レベル、高校生・大学生競技者の比較、運動とスポーツの科学 Vol.19,No.1,pp.45-51,2013.

44) 宮下一博，渡辺朝子；青年期における自我同一性と友人関係、千葉大学教育学部研究紀要 第1部 Vol.40,pp.107-111,1992.

45) 福岡欣治，他；女子学生と既婚中年女性におけるソーシャル・サポート・ネットワークと自我同一性、静岡県立大学短期大学部研究紀要 Vol.14,pp.63-76,2000.

46) 磯谷俊仁，岡林秀樹；大学生の友人関係におけるソーシャルサポートの授受と自我同一性との関連、明星大学心理学年報 No.30,pp.7-16,2012.

47) 萩原悟一，磯貝浩久；スポーツにおける個人・社会志向性と競技者アイデンティティの関連を

基軸としたスポーツ・コミットメントモデルの検討、スポーツ産業学研究 Vol.24,No.1,pp.7-15,2014

48) 久田 満 ; ソーシャル・サポート研究の動向と今後の課題、看護研究 Vol.20,No.2,pp.170-

179,1987

49) 齊藤茂 ; 中途身体障害者のエキスパート・スポーツ選手を対象としたスポーツ・コミットメントモデルの構築、日本体育学会大会予稿集 No.63,pp.133,2012.

50) 菅宏規, 他 ; スポーツソーシャルサポート尺度の開発—信頼性および妥当性の検討—、スポーツ産業学研究 Vol.21,No.2,pp.169-177,2011.

51) Brewer,B.W.,et.al. ; Athletic identity : Hercules' muscles or Achilles heel? International journal of sport psychology.,Vol.24,pp.237-254,1993.

52) 一般社団法人全国ママさんバレーボール連盟 ; ママさんバレーはすべて女性だけで運営しています, 1979, <http://www.mamasan-volley.jp/about/unei.html>. (情報取得 2016/1/3)

53) 小塩 真司 ; はじめての共分散構造分析—Amos によるパス解析 [第 2 版]、東京図書、2014.

54) 豊田秀樹 ; 共分散構造分析 [Amos 編] —構造法的式モデリング—、東京図書、2007.

55) 豊田秀樹 ; 共分散構造分析 [Amos 編] —構造法的式モデリング— [第 4 版]、東京図書、2010.

56) Fornell,C. and Larcker,D.F. ; Evaluating structural equation models with unobservable variables and measurement error,Journal of marketing research.,Vol.18,No.1,pp.39-50,1981.

57) 山本嘉一郎, 小野寺孝義 ; Amos による共分散構造分析と解析事例 [第 2 版]、ナカニシヤ出版、1999.

58) 小塩 真司 ; SPSS と Amos による心理・調査データ解析 [第 2 版]、東京図書、2011.

59) CSI 統計分析セミナー ; 2014 年度秋学期第 6 回 : Amos を用いた多変量解析 2、2014

https://csi.rikkyo.ac.jp/seminar/lecture_resource/%E7%B5%B1%E8%A8%88%E5%88%86%E6%9E%90%E3%82%BB%E3%83%9F%E3%83%8A%E3%83%BC2014%E7%A7%8B%E5%AD%A6%E6%9C%9F%E7%AC%AC%E5%9B%9E%E8%B3%87%E6%96%99%20.pdf. (情報取得 2015/12/27)

- 60) 磯谷俊仁, 岡林秀樹; 大学生の友人関係におけるソーシャルサポートの授受と自我同一性との関連、明星大学心理学年報 No.30,pp.7-16,2012.
- 61) Chen,S.,et.al. ; The effects of sport participation on student-athletes' and non-athlete students' social life and identity,Journal of issues in intercollegiate athletics.,Vol.3,No.1,pp.176-193,2010.
- 62) 高橋美波; 家庭婦人バレーボールの人類学的研究、東北人類学論壇 No.11,pp.63-75,2012.
- 63) 藤本淳也, 他; 女性のスポーツ参与阻害要因に関する研究 II: 12 歳以下の子供を持つ母親のスポーツ観戦者行動について、大阪体育大学紀要 Vol.36,pp.84-94,2005.
- 64) 海老原修; スポーツへの再参加にみる参加動機と参加阻害要因の関連性: 家庭婦人バレーボール参加者における再社会化の検討、日本体育学会大会号 No.46,p.182,1995.
- 65) 岡浩一郎, 他; 日本人成人の身体活動に影響を及ぼす心理的, 社会的, 環境的要因の共分散構造分析、体力科学 Vol.60,No.1,pp89-97,2011.

付録

ママさんバレーボールに関する意識調査

この調査は、皆様がママさんバレーに取り組んでいる時に、自分自身のことをどのように考えているかを調べるものです。以下の説明文を読んでいただき、ご協力いただきますようよろしくお願いいたします。

協力：神奈川県ママさんバレーボール連盟

担当：早稲田大学 大学院スポーツ科学研究科

修士課程 スポーツ施策研究室 福田 誉

本調査に関する説明

1. 調査目的について
この調査は、皆様が普段ママさんバレーに取り組んでいる時に、自分自身のことをどのように考えているかを調べるのが目的です。
2. 調査方法について
調査目的に沿った質問が示されます。質問の指示に従ってありのままにお答えください。解答に要する時間は10～15分程度です。
3. プライバシーの保護について
回答の内容は統計的に処理され、個別に公表することなく、第三者への漏洩および目的外使用も一切行わないことをお約束いたします。個人情報に関しても同様に厳重管理致します。
4. 調査結果の公表について
ママさんバレー発展の為、調査後に得られた情報を基に分析します。また、今後学会などで発表させていただく予定です。

★質問は以降になります。全ての項目にお答えいただくようお願い申し上げます。

【設問1】 ※4項目

項目に示すような状況でも、継続してママさんバレーをする自信があるかお聞きします。それぞれの質問項目に合わせ、あなたが思うことを回答してください。それぞれ最も当てはまる項目にひとつ〇をつけてください。

項目	全く そう思わない	あまり そう思わない	どちらでも ない	やや そう思う	かなり そう思う
①少し疲れているときでも、ママさんバレーをする自信がある	1	2	3	4	5
②あまり気分がのらないときでも、ママさんバレーをする自信がある	1	2	3	4	5
③忙しくて時間がないときでも、ママさんバレーをする自信がある	1	2	3	4	5
④あまり天気がよくないときでも、ママさんバレーをする自信がある	1	2	3	4	5

【設問2】 ※6項目

あなたがママさんバレーを実施する際に、家族や仲間から得られるサポートについてお聞きします。それぞれの質問項目に合わせ、あなたが思うことを回答してください。それぞれ最も当てはまる項目にひとつ○をつけてください。

項目	全く そう思わない	あまり そう思わない	どちらでも ない	やや そう思う	かなり そう思う
①一緒にママさんバレーをする仲間がいる	1	2	3	4	5
②ママさんバレーに誘ってくれる仲間がいる	1	2	3	4	5
③ママさんバレーのことで、アドバイスや指導 をしてくれる人がある	1	2	3	4	5
④ママさんバレーをすることをすすめたり、 ほめてくれる家族や仲間がある	1	2	3	4	5
⑤ママさんバレー好きな家族や仲間がある	1	2	3	4	5
⑥ママさんバレーに関して、自分の事を理解し てくれる家族や仲間がある	1	2	3	4	5

【設問3】 ※7項目

ママさんバレーをする上で、あなたはどのように思っていますか？それぞれの質問項目に合わせ、あなたが思うことを回答してください。それぞれ最も当てはまる項目にひとつ○をつけてください。

項目	全く そう思わない	あまり そう思わない	どちらでも ない	やや そう思う	かなり そう思う
①私は、自分のことをママさんバレープレイヤーだと思う	1	2	3	4	5
②私には、ママさんバレーに関する目標がいく つもある	1	2	3	4	5
③友人にはママさんバレープレイヤーが多い	1	2	3	4	5
④ママさんバレーは、私の生活のなかで最も大 事なものである	1	2	3	4	5
⑤ほかの何よりも、ママさんバレーについて考 えている時間が長い	1	2	3	4	5
⑥ママさんバレーでうまくいかない時は、自分 のことが嫌(いや)になる	1	2	3	4	5
⑦もし怪我をしてママさんバレーができなけ れば、とても落ち込むだろう	1	2	3	4	5

【設問4】 ※6項目

ママさんバレーについてお聞きます。それぞれの質問項目に合わせ、あなたが思うことを回答してください。それぞれ最も当てはまる項目にひとつ○をつけてください。

項目	1	2	3	4	5
①あなたはママさんバレーに、どのくらい打ち込んでいますか？	全く打ち込んでいない	あまり打ち込んでいない	どちらでもない	やや打ち込んでいる	かなり打ち込んでいる
②あなたにとって、ママさんバレーをやめることは、どのくらい難しいことですか？	全く難しい	あまり難しい	どちらでもない	やや難しい	かなり難しい
③あなたは、ママさんバレーを継続することに、どのくらい強い決意を持っていますか？	全く持っていない	あまり持っていない	どちらでもない	やや持っている	かなり持っている
④あなたは、ママさんバレーを自らすすんで行っていますか？	全く行っていない	あまり行っていない	どちらでもない	やや行っている	かなり行っている
⑤あなたは、ママさんバレーをしていることを他人にどのくらい、自慢できますか？	全くできない	あまりできない	どちらでもない	ややできる	かなりできる
⑥あなたは、ママさんバレーをこれからも続けたいですか？	全く続けたくない	あまり続けたくない	どちらでもない	やや続けたい	かなり続けたい

【設問5】 ※13項目

ママさんバレーの練習や試合に参加することを妨げている理由は何ですか。以下について、それぞれ最も当てはまる項目にひとつ○をつけてください。

項目	全く あてはまらない	あまり あてはまらない	やや あてはまる	とても あてはまる
①仕事や生活が忙しいから	1	2	3	4
②ママさんバレー以外のことをしているから	1	2	3	4
③ママさんバレー以上に大切なことがあるから	1	2	3	4
④生活や仕事でからだを動かしているから	1	2	3	4
⑤子どもに手がかるから	1	2	3	4
⑥疲れるから	1	2	3	4
⑦面倒くさいから	1	2	3	4
⑧下手だから	1	2	3	4
⑨お金がかかるから	1	2	3	4
⑩生活費に余裕がないから	1	2	3	4
⑪施設がないから	1	2	3	4
⑫高齢だから	1	2	3	4
⑬病気やケガをしているから	1	2	3	4

■ 具体的にどのようなサポートがあれば参加できると思いますか？家族やチーム、連盟への要望などありましたらご自由にお書きください。

当てはまる部分には○印、および（ ）内をご記入ください。

①所属地区連盟：（ ）	②年齢：（ ）才
③職業： 1. 会社員 2. 公務員 3. 教員 4. 自営業 5. 専業主婦 6. パート・アルバイト 7. その他（ ）	
④お子さま：（ ）人 →そのうち、末子（一番下の）年齢（ ）才	
⑤バレー開始年齢：（ ）才 ⑥バレー歴（実際に活動した年数）：（ ）年 ※例）中学校3年間＋高校3年間＋PTA2年間＋ママさん2年間⇒10年	
⑦ママさんバレーでの中断経験（1ヵ月以上参加できない期間）：あり ・ なし →「あり」を選択・○をされた方は、以下の質問に <u>全てお答えください</u> 。 （1）バレー中断回数（ ）回 （2）バレー中断（複数回の場合は平均）期間（ ）ヵ月 （3）バレー中断理由（複数回答可） 1. 出産 2. 育児 3. 怪我 4. 引っ越し 5. その他（ ） （4）バレー復帰理由 [] ※例）チームメイトからの誘いがあった。元々復帰するつもりだった。など	
⑧昨年1年間の大会参加回数：（ ）回 ⑨大会での競技レベル（ママさんバレーでの経験。複数回答可。）： 1. 市区町村大会（交流・親睦大会含む） 2. 県大会 3. 関東大会 4. 全国大会（一般） 5. 全国大会（いそじ大会以上） 6. その他大会（ ） ※1～4は「いそじ以上の方」も含まれます。	
⑩最近のママさんバレーの活動についてお聞きいたします。以下の全ての質問に対する回答として、当てはまる数字に○をつけてください。 （1）最近1ヵ月間を平均して、どのくらいバレーボールの活動を行いましたか。 0. 全くやっていない 1. 月に1回程度 2. 月に2～3回 3. 週に1～2回 4. 週に3～4回 5. ほぼ毎日 （2）それはどの程度の強度の運動でしたか。 0. 全くやっていない 1. きつくない運動 2. 適度なきつさの運動 3. かなりきつい運動 4. 非常にきつい運動 （3）そのような運動を1回につき平均何分くらい行いましたか。 0. 全くやっていない 1. 15分未満 2. 15～30分未満 3. 30～60分未満 4. 60～90分未満 5. 90分以上	

以上で全ての質問項目は終わりです。お疲れさまでした。
 最後までご回答いただきありがとうございました。